社会人講師を授業に活用

生徒に社会を意識させ、刺激を与える

あきる野市立増戸中学校　紙澤雅一教諭（前・大賀郷中学校）

＜プロジェクト以前＞

私は大学の専攻が分析化学で、自然や環境に興味を持っています。そのこともあって、島嶼部の学校を希望し、八丈島の大賀郷中学校に勤務することができました。Fortran、C言語といったプログラム開発言語も一通り学んでいました。その頃、パソコン通信で100校プロジェクトについて知り、「これは面白い」と思いました。校長先生も、別ルートでご存知だったため、2人で話し合い、応募しました。八丈島の地域性を強調した企画だったと記憶しています。

実践の経過、教訓

ネット利用の初期段階

転任間近だったため、大賀郷中学校には残念ながら100校プロジェクトの立ち上げの時期しかいることができませんでした。そのため、私自身は目立った実践を行っているわけではありません。ただ、当時感じたことは、コンピュータが人の目に触れ始めた頃だったためか、子どもたちはネットワークの概念を理解できない、ネットワークを介して「外とつながっている」という感覚を持つのが難しかったように思います。

次に赴任したあきる野市立増戸中学校はコンピュータが40台導入されていても外部とは接続されていませんでした。そこで、こねっと・プランに応募したところ、運良く採択されました。それを生かし、どのコンピュータからもインターネットに接続できるようにしました。

こねっと・プランは、テレビ会議システム（フェニックス）を使って、社会人講師的なプロジェクトを実施していました。例えば、歌人の俵万智さんをメインの会場に招いて、子どもたちの質問にお答えいただくといった内容です。授業というよりは、イベント的な性格が強かったように思います。ただ、フェニックスは当時はまだ通信料金が高く、しかも総合的な学習の時間が始まる前でしたので、交流相手校がなかなか見つからない、という課題がありました。

生徒の語彙不足→朝の読書活動

また、12年度から13年度までの2年間、財団法人データベース振興センターの「教育分野におけるデータベース利用推進事業」に実験校として参加しました。そのおかげで、データベースを無料で利用することができました。

内容は、テーマを決めて新聞のデータベースを検索し調べ利用する、というものです。子どもたちにいろいろと検索させたのですが、「うまく検索ができない」、「キーワードをうまく選べない」といった子どもが多くいました。その結果、シソーラス的な部分（語彙集）、言葉の選択がうまくいかないのではないか、と考えました。そこで、「言い方を変える」、あるいは「具体的な言葉を入れる」と指導すると検索できるようになりました。それまでも一般的に、子どもたちは「言葉を知らない」、「語彙が不足して

みんなで作る！社会人講師実践映像データバンク@東京

社会人講師による授業の様子を映像や写真、文章で紹介するデータベース。

映像データベースにより、社会人講師を活用した授業を教師が企画しやすくする、講師選択を容易にする、といったことがねらい。

「クリエイターの仕事」、「仕事への興味を持続しよう」、「仕事の面白さを探検してみよう」、「押し絵羽子板の世界」、「音楽とのふれあい」といった実践例がWeb上に紹介されている。

http://www.tokyo-ed.net/

いる」と言われていましたが、情報検索させてみて改めて自分の勤務する学校でもそのことが明確になりました。

コンピュータ教育の中でも、「言葉を豊かにすること」の必要性を再認識したのです。そこで、対策として「ことばの時間」を設けました。朝の始業10分前の時間を利用して、「本を読むように」と言いました。その結果、急激に図書館の利用が増えました。「言葉が豊かになったかどうか」の検証は難しいですが、子どもたちの朝の時間の過ごし方は落ち着いてきたと思います。

社会人講師を迎えて

教育課程の中に組み込む

次に学校の基本である教育課程の中で実施するという視点で、「社会人講師をカリキュラムの中に組み込む良い方法はないか」と考え、はじめたのが財団法人コンピュータ教育開発センターのプロジェクトである「みんなで作る！社会人講師実践映像データバンク@東京」です。この実現には、東京の教育情報化の促進を目的にしている「とうきょうED（えど）」のメンバー、とりわけ三橋先生（墨田中学校）、榎本先生（東京都総合技術教育センター）との出会いが大きいです。

これを活用し、福祉の授業などで実践を行いました。

増戸中学校の校区は1小学校・1中学校ゆえ、保守的という状況がありました。このため、子ども同士が与え合う刺激が薄く、外部の人を呼ぶと刺激になると考えた訳です。中学1年生では進路学習と関連づけて、リクルート社の方を講師にお呼びしました。中学2年生では、福祉産業ということで、都心部の施設を訪問します。そこで、奈良・薬師寺の塔の再建に関わった宮大工の方の話を聞きました。この方は、「お寺こそバリアフリーであるべきである」と考えており、住環境がどうあるべきかを考えさせるとともに、図面や道具を見せることで、子どもたちの興味関心を高めることができました。

10年間を振り返って

「新技術をすぐに学校に」がICT活用の原動力

私がICTを活用し続けているのは、新しい技術に対する興味が強く、新しい技術が出ると、いつも「学校で使えないかな」と考えてきました。こうした日頃の関心が、継続している理由の一つだと思います。また、これまで赴任した中学校は、必ずしも教育の機会に恵まれた環境ではありませんでしたので、「子どもたちにできるだけよい教育機会を提供したい」という思いが強かったということも影響していると思います。

＜成功の秘訣＞

これまでの実践を踏まえ、成功の要因をいくつか述べさせていただきます。

●動きながら考える

私は「教育に利用できそう」と思ったらすぐに取り組みます。日頃からそういうスタンスでやっています。教育においても「いろいろと試す」ことが重要ではないでしょうか。そういった取り組みをしないと質の向上は図れないと思います。

●行政の動かし方

新規のことを行うには、ある程度のお金が必要です。そのためには、行政を動かさなければなりません。しかし、行政は成果の出ないところにはお金をつけません。こうした時、私は「回線が細いとここまでできる。しかし、お金をつけて太くしてくれるとここまでできるようになります」という言い方をしています。

●社会人講師の位置づけ

社会人講師による授業を実践した経験から、先生方は社会人講師を「イベント的に考える人」と「教育課程の中に組み込もうと考える人」に分けることができると思います。しかし、私は社会人講師が行う授業は、カリキュラム化しないと校内での受け入れは困難であると考えます。そうすることによって、「学校を外に開こうとする意識のない人」にも受け入れられやすくなると思います。